

蔣介石と上海交易所

—— 株式仲買人時代について ——

(明治学院大学) 横山 宏章

はじめに

中国革命に活躍した「英雄」のリストには、孫中山や毛沢東をはじめ、個性豊かな人々が綺羅星の如く並んでいる。その中で、最も魅力的な人物の1人として蔣介石をあげることが許されよう。魅力的という意味合いは幅広いが、蔣介石で言えば、政治的財産としての複雑怪奇、且つ豊かな人脈を築き上げたということが上げられよう。複雑怪奇とは、その人脈が多岐に渡っているからである。

軍人、政治家は言うまでもなく、財政的豊かさを可能にした浙江財団との提携、そして極めつけは、中国語で黒社会といわれる裏世界を支配するギャング、特に青幫系ギャング集団との深い結びつきである。蔣介石が最初に従事したのは辛亥革命で上海都督となった陳其美である。彼は同盟会の幹部であり、同時に上海青幫の大頭目でもあった⁽¹⁾。陳其美を通して蔣介石は幅広い人脈に入り込むこととなる。一方では孫中山に紹介されて国民党の軍人として台頭、ついには孫中山の片腕であった汪精衛、胡漢民、廖仲愷の文人幹部を凌駕し、軍人政治家として権力を掌握した。政治的権力の表世界を駆け昇ると同時に、他方では闇の裏世界を支配する青幫との繋がりを広げていった。それは「上海三聞人」ないしは「青幫三大亨」といわれる黄金榮、杜月笙、張嘯林との結びつきである。こうした青幫との結びつきは、陳其美の甥である陳果夫、立夫兄弟との交流と深い関係をもっている。陳兄弟は後に「四大家族」と言われる一族支配を築き上げたが、青幫との結びつきを利用して、国民党における秘密警察組織を整備、蔣介

石の強権支配を裏で支えた。張静江、虞洽卿らの浙江財団との関係もこうした一連の人脈づくりと関係している。蔣介石は反袁世凱の2次革命に失敗したあと、孫中山から離れて、上海で失意の無聊生活を送っていた。その期間、上海の青幫と深い関係を築くとともに、上海証券物品交易所（証券取引所、以下は上海交易所と省略）に勤務し、その活動から張静江らとの関係を深くしていった。

蔣介石はなぜこのような胡散臭い連中と関係を深めていったのであるか。それは蔣介石の置かれていた政治的環境と深い関係がある。蔣介石は国民党の世界では、ある意味においては異端の存在であった。国民党は孫中山が創設したこともあって、その幹部の多くは広東出身者で固められている。浙江省奉化县出身の蔣介石は、地縁的にいえば余所者である。そしてその激しい性格もあって、国民党の主流を占める広東系黨員とはトラブルが絶えなかった。また国民党はその創世期から武力闘争を旨としていたが、孫中山はいうまでもなく汪精衛、胡漢民、廖仲愷をはじめとしたエリート幹部の中核は教養豊かな文人によって構成されていた。その中で軍人としての蔣介石が政治的に台頭していくには、文人政治家を凌駕する豊かな人脈で対抗する以外になかった。異端の存在としての蔣介石が激しい権力闘争を勝ち抜いていくには卓越した権謀術数を駆使する必要があったし、その政敵を打倒していくために、通常な人間関係を越えた複雑怪奇な人脈が大いに貢献したのである。国民革命の同盟者として提携した共産党の台頭を恐れた蔣介石が、上海において青幫勢力を利用して共産党・労働組合弾圧に乗り出した事は有名である。また青幫勢力を組織して秘密警察組織とし

ての軍統を駆使し、政敵を牽制していった。

青幫とは幫会（会党）といわれる伝統的秘結社の一派である⁽²⁾。会党は「江湖の俠人」と言われる無頼の徒を中心に組織されているから、英語に直せばギャングということになる。確かに社会のアウトローによって構成されているから、それは反社会集団であるが、中国においては度々政治世界に登場してきているという特殊性がある。それは、反権力の性格を秘めていたからである。清朝末期、孫中山は清朝打倒の反満洲王朝闘争に於いて、反清の性格が濃厚であった会党の軍事力と提携してきた⁽³⁾。だから、陳其美をはじめとして同盟会メンバーには会党との関係が深い人々が多い。この意味からして、蔣介石が青幫と深い関係を有していたということは、特別奇異なことではなかった。ただ、会党のなかでも青幫は比較的都市を中心としたギャング的性格が強いものであった。中国最大の近代都市として発達した上海において、旧い会党は伝統的義俠集団から、権力と癒着した暴力集団に変化しつつあったのである。蔣介石はそうした伝統的性格の濃い反社会的集団と深い関係を結ぶ事で、近代革命としての国民革命を推進しようとした。そこに、蔣介石政治の特殊性を見る事ができる。

ここでは、そうした蔣介石の人脈政治の原形が形成された1つの時期である2次革命後における上海での蔣介石の活動を検討する。いわゆる上海交易所問題である。蔣介石が上海交易所で働いていた問題である。なぜ問題かといえば、国民党の正史の中には、この事実が登場しないからである。また、近年大陸で出版された蔣介石に関する伝記の中にも、その扱いにおいて濃淡がみられる。しかもその事実問題において、十分な歴史的物証が不十分であるという問題も含んでいる。蔣介石が上海交易所で働いていたことは間違いないであろうが、依然としてその全体像はつかめないままにある。

蔣介石伝ないしは蔣介石論は、これまで学問的に論じられることが極めて少なかった。それは政治的に論じられる宿命にあったといっても過言ではなかろう。蔣介石が国民党・国民政府の最高領袖となって以来、いわゆる神聖化が進み、その権威を強化する立場から伝記が記されてきた。だから、政治的に不都合な部分は抹消されるか、改竄されてきた。蔣介石が孫中山の革命運動から離脱し、上海で株の投機に奔走するとともに、胡散臭い青幫に出入りしていた事実は、近代中国を建設する政治指導者の経歴としては望ましいものではない。だから、その正史的伝記においては、その事実すら描かれていない。

一方、共産党の蔣介石論は、蔣介石が反人民の墮落した独裁者であることを強調する必要があるため、上海交易所の活動や青幫との繋がり、絶好の材料となっていた。十分な証拠のないまま、蔣介石の「悪業」が強調されてきたのである。

近年、共産党の蔣介石評価も変化を見せてきている。「实事求是」精神による客観的記述を求める雰囲気が出来てきたことと深い関係がある。しかし政治的色彩が無いわけではない。台湾との統一という政治的要請にともない、蔣介石評価を変えてきているからである。しかし、なにはともあれ、少なくとも客観的記述に近づこうとしている姿勢は十分に評価できよう。

そこで、そうした最近の蔣介石論を紹介しながら、そこで上海交易所問題がどのように扱われ、それが蔣介石政治の性格規定にどのように絡んでいるかを検証してみたい。それは単なる歴史の一齣を論じることになるのではなく、そこに蔣介石政治の本質の一端が潜んでいると考えられるからである。

1. 最近の記述

近年、大陸において蔣介石の伝記がたて続けに出版された。宋平『蔣介石生平』（1987年）、楊

樹標『蔣介石伝』（1989年）、王府民『蔣介石伝』（1989年）⁽⁴⁾である。1980年に出版された榮孟源『蔣家王朝』⁽⁵⁾の書名と比べるだけでも、その変化を見る事ができよう。長い間にわたって蔣介石評価の基準となっていた1949年出版の陳伯達『人民公敵蔣介石』⁽⁶⁾の表題から見れば、雲泥の差である。榮孟源著書では、まだ蔣介石批判の意図が濃厚に現れている。勿論、そうした傾向が現在でも存在しないわけではない。1989年に出版された匡長福他『権与銭——蔣宋孔陳聚財録』⁽⁷⁾は、いかにして「四大家族」が権力と財力を傘に悪業を重ねたか、を論証せんとしている。しかし先の3つの伝記は、蔣介石を総体として批判しながらも、出来る限り、歴史の時点に立って、評価できる点は評価しようとする努力を見せている。例えば楊樹標はその伝記の最後で、「どのように蔣介石を評価すべきか」というテーマを掲げ、蔣介石の生涯を5期に分けた中で、2度の国共内戦期を除き、基本的には肯定できる人物であると論じている⁽⁸⁾。陳伯達が徹頭徹尾、蔣介石を悪玉とした論調とは大変化である。

これらの著書の中で、上海交易所問題はどのように描かれているのであろうか。

宋平、王府民の両著は、比較的簡明に描かれているにすぎない。宋平書は本論 585頁にのぼる大書であるにも関わらず、わずか9行しか触れていない。短いので全文を紹介する。

「1916年秋、蔣介石は上海に行った時、張人杰（静江）、戴季陶、陳果夫の3人はちょうど上海証券交易所の仕事をやりはじめた時であった。環境が苦しかった蔣介石も交易所の活動に参加した。上海における蔣介石の証券取引の仕事は6年近くも続いた。この期間、彼は浙江財団、上海流民集団の頭目と堅い契りを結ぶことになった。張人杰は浙江吾興の四大豪門（名家）の1つである。陳其美一家も浙江興興の商人である。また陳其美は蔣介石を上海の青幫に引き合わせ、前後して著名

な幫会首領の黄金榮、杜月笙など行き来が親密になった。その後、蔣介石が上海の封建的幫会勢力を利用して革命を鎮圧し、革命労働者を虐殺したのは、この時期の活動と深い関係がある。」⁽⁹⁾

王府民も18行しか触れていない。

「蔣の上海における証券取引経営のことは甚だ順調であり、財をなした。『半年もたたないうちに、巨額の利益を得、元金と利子を合わせて10数万元にのぼった。立派な富豪である』。1916年8月から2年近く、蔣はずっと上海に滞在した。この期間、証券取引の仕事を主としていた。当時、かれらの仲間の牌号は『恒泰号』であり、資本は3万5千元。1株千元で、全部で35株。株主は全部で17人。張静江本人は5株で、家族全部で合計13株所有した。このため、張の甥である秉三が『恒泰号』の経理となった。蔣介石（蔣緯記）は4株、戴季陶（小恒記）は2株、陳果夫（陳明記）は1株。蔣の4株は張静江が彼に預けたもので、彼本人は1株も所有していなかった。彼等は日本の某企業と共同で『協進社』を組織し、証券取引を進めた。この蔣の取引活動は1922年まで続いた。1919年、蔣はまた虞洽卿らと上海証券物品交易所を開設した。理事長は虞洽卿が就任した。理事は17人、合計で10万株とした。日本企業が7万株を担保し、中国企業が3万株を担保した。1920年末、270万元の利益を得た。日本企業への担保と4万株を残すための金を引いて、余りが32万5千元に達した。その全部が戴季陶、張静江、蔣介石の収入となった。また4万株の株券が120元に高騰し、合計480万元の株券となった。その全ても彼等3人のものとなった。蔣はこのような濡手で粟の大金を手にした。1922年、蔣は証券交易所を離れ、4万元を携えて広東に行き、新しいポストに就いた。」⁽¹⁰⁾

1988年に出された『中華民国史資料叢稿・人物伝記』第23輯掲載の宗志文・嚴如平・鄭則民「蔣介石」は52頁にわたる長編であるが、極めて簡素

な叙述である。

「1920年、彼は戴季陶、張静江、陳果夫らと上海で資金を出し合って『恒泰号』を設立し、証券投資の事業を経営した。交易所の仲買人となり、虞洽卿、杜月笙らと知り合った。商売で非常な利益を得て、その一部は広東軍と革命事業に資金援助を行った。またその一部は酒や女や飲食に費やされた。1921年冬、上海交易所が危機に面し、12月に蔣介石は孫中山から呼ばれて桂林に赴いた。」⁽¹¹⁾

この3資料はいずれも簡単な記述であるが、共通する点と異なる点が明らかとなっている。共通する点は、この上海時期に浙江財団の虞洽卿、上海青幫の杜月笙らと関係を結んだということである。また後の2論文は、蔣介石が証券取引で巨額の利益を得たことを強調している。異なる点は、上海を離れた時期であり、一方は1922年に広東に向かったとあり、一方は21年12月に桂林に向かったとある。とはいえ大きなずれはない。

だがいずれもこの時期に関わる記述が短いと同時に、この時期の蔣介石の活動が、彼の政治スタイルを形成する重要な時期であるとの指摘は殆どない。言わばこうした複雑怪奇な人脈の形成に大きな意義を見出してはいないのである。

これに対し、楊樹標は「浙江財団支持蔣介石」の1節を設けて、張静江及び虞洽卿らとの結びつきを詳細に論じている。同節は11頁にもわたり、上海交易所の活動についても4頁にわたっている。数行の説明に過ぎなかった先の諸論文とは際立った違いを見せている。しかしその結論は、上記の説と大きく違っている。楊樹標は従来の記述や回想を丁寧に紹介しつつも、その多くが事実と異なっている事を力説しているのである。

上記の説は、いずれもかなり長期にわたって蔣介石が上海交易所の活動に関与していたと記している。宋平は6年間続いたと述べ、王俯民も1916年から22年まで続いたという。後に紹介する、これまで明らかにされている記述や回想の殆どは、

王俯民などが主張する期間にわたって、蔣介石が証券取引に従事していることを強調しているのである。楊樹標はそうした資料を紹介しつつも、次のような批判を行っている。

「蔣介石の政治的台頭以前から、張（静江）と虞（洽卿）の2人は蔣と深い関係を結んでいた。……張、虞は蔣と上海の交易所の活動で一段と交流を重ねていた」⁽¹²⁾と、基本的には共通した認識を持ちながら、蔣介石の活動における上海交易所のもつ比重を重視していない。従来の諸説を紹介しながら、「諸説紛々であるが、歴史的事実から言えば、蔣介石が交易所の活動に関与した期間は短く、主要な人物でもなく、実務に従事したのも僅かである」⁽¹³⁾という。

またある資料では、蔣介石は一旦大儲けしたものの、株価が暴落して上海交易所が不況となり、忽ち破産したという説がある。これらの諸説に対しても、次のように否定している。「これらの説は全て歴史事実符合していない。蔣介石が孫中山のもとに走ったのは上海交易所が倒産する以前であり、1918年春には広州へ南下した。」⁽¹⁴⁾

先にも指摘した如く、蔣介石が上海交易所の活動から足を洗って孫中山のもとへ再合流するのは1922年前後と言われているが、楊樹標は極めて早い段階で上海を去ったことを強調している。但し、この上海を離れる時期の諸説の違いについては、いずれも確固とした資料的証拠を提示するには至っていない。

最後に『権与銭』を紹介する。蔣介石一族については、65頁にわたって記述されているにすぎないが、約5分の1に当たる13頁にわたって、上海時代の蔣介石の活動を記載している。この書物の目的が、蔣介石の犯罪的活動を強調するところにあるという性格から来るものであろう。

「蔣介石の財を掻き集める手段の巧妙さは、一夜で身につけたものではない。早い時期に証券交易所を経験することで、その絶好の基礎を築いた

のである。」⁽¹⁵⁾ この記述からも分かるように、ここでは上海交易所の活動が、その後の蔣介石の政治スタイルの基礎を築き上げるのに大きな貢献をしたと重視している。もともと証券取引で一儲けしようとするのは孫中山の発想であり、そこで活動することそのものは、革命家としての活動に傷がつくものではない。それにもかかわらず、国民党や台湾の正史から、この活動事実が抹殺されているのは、その活動の内容が、蔣介石の政治経歴に傷がつくと判断されたからかもしれない。この点について、次のように記している。

「孫中山先生はかつて上海証券物品交易所の創設を提案したが、このことと、後の戴季陶、張静江、陳果夫、蔣介石らが上海交易所で投機に力をいれたこととは、大きな違いがある。この連中は根本的に孫中山が構想したこと——即ち革命経費を捻出すること——とは違って、自分たちの快楽と錢儲けのために財を横領したのである。」⁽¹⁶⁾

但し、この記述は実証性を持たない。確かに上海における蔣介石の活動はその後の蔣介石政治スタイルを形成する上で、大きな転換期となった。そこで得た人脈をフルに利用して、彼の政治的台頭の道具としたが、それは革命期における1つの政治スタイルであって、それを直ちに個人的野望のための活動と断定することは過ちではなかろうか。解釈的側面は別にして、事実関係について言えば、次のように記している。

「蔣介石が交易所の活動に参加したのは、1916年9月である。……1916年から1922年までの6年間、蔣介石と戴、張、陳らが得た利益は合計 512 万元以上にのぼる。」⁽¹⁷⁾

青幫との関係では次のように記している。

「黄金榮と杜月笙は上海黒社会の頭目であり、幫主であった。非常に有名な上海の『聞人』（著名人）であった。交易所で投機活動をしていた蔣介石が関係を深めたことは、この仕事をしている人々から見れば、『羨望』著しいものがあった。

杜月笙は交易所の支配人であり、交易所の理事長である虞洽卿もまた青幫の頭目であった。蔣介石は交易所で仲買人の仕事をする事で、自然と彼等の庇護を得る事ができた。……『聞人』たちとの関係は、蔣介石にとって無形の力となったのである。」⁽¹⁸⁾

最後に、上海を去る状況について。「1922年2月、交易所には現金がなくなり、『死刑』宣告された。大量の株券がただの紙屑となり、交易所の人々はとても困難に遭遇した。中には黄浦江に飛び込む人も出た。この苦しい時に救世主が現れた。日本が前からの約束で交易所に 100 万元を援助し、多くの人々がこの費用について相談した。このニュースを聞いた蔣介石はそこから20万元を手に入れた。……蔣介石はこの錢を持って広東に去った。広東に去るに当たり、虞洽卿の紹介で黄金榮を師と拝し、正式に青幫に加入した。」⁽¹⁹⁾

以上は大陸での記述であるが、台湾で孫中山や蔣介石の権威に挑戦し続けている異色の李敖は、関係者の回想を紹介して、蔣介石と青幫の黄金榮の関係を強調している。そして次のように括っている。「蔣介石は奸智にたけた英雄である。彼のもちまえは非常に複雑である。黄埔学生の前では校長である。浙江の同郷の前では郷長となり、国民大会の代表の前では総統となる。錢穆や曾約農など昔気質の連中の前では皇帝であり、幫会特務の前では大龍頭となる。」⁽²⁰⁾ まさにこうした使い分けをすることで、蔣介石は多彩な人物を自己の権威のもとに集合させることに成功したのである。

2. 従来の諸説

次に蔣介石が大陸を失って、失意のうちに台湾に逃げ込んだ時期の前後における、この関係の記述を検討してみたい。少し古くなるが、1940年に出版されたErnest O. Hauser “Shanghai: City for sale” では、次のように描かれている。

「蔣介石が上海で成功したと思われる側面は、軍人としてよりは寧ろ株の仲買人としてであった。彼の後見役であった陳其美は暗殺されてしまったが、骨董豪商であり、革命初期の財政家でもあった張静江が野心満々の青年と関係を結んだ。彼は財政援助を行い、蔣介石は金相場に多額の資金を投入し、驚くばかりの成功をしでかした。1年もたたない間に大金を稼いだ。しかし投機を続けた結果、全てを失った。そして3万ドル以上の負債を抱えてしまった。張静江が3万ドルを与えて負債を精算した。そして孫中山に書簡を送り、蔣介石は市場よりも戦場でより多くの満足を見つけるであろう、と記した。」⁽²¹⁾

ここでは、蔣介石は一旦大金を手にしたが、最後には大損をしたことになっている。そして張静江が、その尻拭いをしたことになっている。先の『権与銭』では、その尻拭い役は魏伯楨となっている⁽²²⁾。ただ上海で投機活動に従事していたことが、外国人の間にも有名であったことを物語っている。

1948年に香港で出版された鍾器聲『大財閥蔣介石』は、この上海交易所の記述について、基本的に Hauser の書に依拠している。徐青甫の紹介で上海交易所の株仲買人の助手となった蔣介石は、張静江から借りた3千元を元手に株取引に手を出し、巨額の金を儲けたが、一転して3千元の負債を背負い込んだ、とある⁽²³⁾。

毛沢東の側近である陳伯達の『人民公敵蔣介石』は、蔣介石の全面的批判の書である。そこでは次のように描かれている。

「蔣介石、戴季陶、陳果夫の類は、全て上海買弁交易所の活動人物である。ただの名目的売買が交易所の特徴である。ここでの売買は真実の売買ではない。需要と供給も真実のものではない。純粹に財テク賭博である。投機、デマ、詐欺、誘惑、アウトロー、冒険、残酷など、これら一切の目的は全て自分の金儲けのためであり、そのためには

多くのひとが破産しても意に介さない。……蔣介石は交易所の仲買人となり、その世界にドブブリ浸かった。十分な訓練を受け、交易所における金儲けの秘訣に全て精通した。……この交易所での訓練は蔣介石の政治生活にとってとても重要である。なぜなら、彼がここから知った吸血鬼的手段はとても多く、とても残酷であったから。」⁽²⁴⁾

蔣介石が人格的に悪辣な人物であったことを強調するという政治目的から記述された書物であるから、そこでの表現は極めて主観的にならざるをえない。ただここで陳伯達が強調したかったことは、蔣介石の政治性の中に、資本主義的性格と同時に、そうした封建的遺制としての青幫と結びつくことで、封建的性格が濃厚であるということである。

陳伯達の記述は、交易所の活動に関していえば、極めて雑駁である。その全体像を明らかにしたのは、1952年に香港で発表された唐人『金陵春夢』⁽²⁵⁾である。これは蔣介石の裏面を小説風に描いた大作であり、とても評判を得たものである。ここでは1920年代に孫中山のもとへ参画する以前の上海時代に、蔣介石が放蕩三昧な頹廢的生活を送り、青幫勢力との関わりや、証券取引に精力を注いでいたことが、56頁にわたって見事に描かれている。

「蔣介石が上海で廓遊びや賭博に狂い、酒に溺れた生活を開始した。その時の交遊関係は3種類に分けられる。その第1種は、陳其美の甥である陳果夫、陳立夫と浙江財閥の張静江、それに戴季陶などの交易所仲買人である。……別の1種は、彼の師父である黄金榮及び張嘯林、杜月笙、虞洽卿らの類である。その威風を吹かせて兵器を密輸し、贋金を造り、人身売買し、娘を女郎に売り飛ばし、アヘンを商い、賭博場を開設し、暗殺を請負うなど、まことに何でも仕出かした。もう1種は、張羣と黄郛であり、『智慧袋』的政客の類である。……これら3種類の仲間と交わりながら、蔣介石がヤクザな生活を送ったのは10年の長きに

わたった。」⁽²⁶⁾

「上海に戻ったあと、臆面も無く軍隊を辞めて商業に従事した。聞くとところでは、ちょうど上海証券交易所の仲買人に人気が高まっていた時であり、正式に参加した。手を尽くして第32号の仲買人のポストを得た。この仕事は徐青甫が紹介したものであり、蔣が徐を老師と称するのは、ここから来ている。……当時、蔣介石と一緒に交易所でこの『売買』の仲買をしていたのは張静江、張弁羣兄弟、周佩箴、孫棣三、朱孔陽などで、これらは浙江の富豪である。戴季陶、陳果夫は別の一群で、本来的に金がなかった。……蔣介石は最も金がなく、面白くないということもあって『蔣偉』という仮名を使っていた。」⁽²⁷⁾

「彼の投機は巧みで、非常に見透す技術にたけており、株価の浮き沈みの激しい中で、僅か1年で成功し（民国8年から9年〔1919～20年〕）、100万元を儲けた。それで日本に渡り遊び惚けた。紙幣、銀貨、女、酒……全てが蔣介石の手の中で舞い踊った。彼は狂喜し、中国服を脱ぎ捨てて洋服を着用し、小部屋を出て大きな豪邸に住んだ。交易所の古い人力車には乗らず、斬新なピカピカの車を買ひ、チリンチリンと鳴らせて街中を走った。張静江は感心して言った。『お前は後生畏るべし！ 当時、お前に3千元を貸し与えただけなのに、今では100万元以上を稼いでしまった！交易所の売買はもともと大賭博である。お前には眼光、魂力があり、それを上手に発揮している！』」⁽²⁸⁾

「民国10年（1921年）、この商売の全盛期も黒雲が立ち込めた。上海交易所にも不景気が吹き荒れ、この暴風の中で『恒泰号』も消え失せた。張静江、戴季陶、陳果夫らは100万元以上を失った。借金如山ほど積まれ、上海に居られなくなった。蔣介石も例外ではなく、倒産してしまった。負債3千元を抱えた。……張静江、戴季陶、陳果夫らは上海にはとどまれないことをはっきりと知った。そこで別の道をとることとした。こうして広東に

行き、『革命』に参加することになったのである。その前に張静江は蔣介石に3千元を工面して渡し、負債を精算させた。」⁽²⁹⁾

これは小説風に描かれた読物であるから、事実関係について資料が明記されているわけではない。ただ1箇所だけ、資料が提示されている。それは1920年12月15日に書かれた恒泰号の合同契約文である⁽³⁰⁾。そこに蔣偉記、即ち蔣介石のサインがあるとされている。これが唯一、揺るぎない物証である。結局のところ、唐人によれば、蔣介石は辛亥革命後の1912年から上海で青幫の連中と交際をはじめ、1921年までそうした放蕩生活が10年間続いたと主張している。その一環として1919年から21年まで、上海交易所で一儲けし、かつスッテソテンになり、ついに上海を放棄して広東の孫中山のもとに合流するのである。唐人の『金陵春夢』は全8巻にも及ぶ長編であり、この蔣介石初期のエピソードは第1巻に描かれたものであるが、それまで噂されていた上海時代の蔣介石の行動を虚実織り混ぜて、初めて明らかにしたものである。

唐人の後、大陸ではあまり蔣介石伝は書かれていない。1980年になって出版された榮孟源『蔣家王朝』と何干之『中国民主革命時期的資産階級』がある。これらは、依然として蔣介石批判の書であるが、基本的に唐人などの視点と変わらない。ただ榮孟源はその後に発表された資料などを利用している点が新しい。

「上海で蔣介石は徹底した放蕩人生を過ごした。終日酒宴に浸り、盛り場をさ迷った。……蔣介石が上海でヤクザな生活と交流を続けていた事は、蔣家官書には、当然ながら詳細には記載されることができない。しかし腐り果てた生活について自分自身も隠しきれない」⁽³¹⁾と言い、1924年3月の蔣介石の手紙を紹介して、その物証としている。その手紙では「5,6年前、自分を失って茫然自若としており、何をやっているか分からなかった」⁽³²⁾とある。また蔣介石の公的な年譜である『民国十五年

前之蔣介石先生』を検討した結果、辛亥革命以後、そこに記載されている「蔣介石の活動が全て革命に参加したものであるとしても、全部でその日数は2年に過ぎない。辛亥革命後の10年間、彼の大部分の時間は上海であった。その期間、交易所の仲買人をしていたのである。」⁽³³⁾と、指摘して、上海交易所の活動がスッポリ抜けている事を強調している。

何干之の遺著となった『中国民主革命時期的資産階級』は、もともと「蔣介石伝」として意図されたものである。ここでは陳伯達以来の「人民の公敵・蔣介石」という表現が用いられており、旧態依然とした観点に貫かれている。「辛亥革命失敗の後、蔣介石や戴季陶らは上海にあって、国民党から支給される生活費に頼っていた。政治的失意のあまり、上海で投機事業に従事した。日本の資本家が設立した上海証券物品交易所に紛れ込んだ。市場において人を騙し続けて一時は大金持になった。また放蕩三昧に遊んで貧乏人に落ちてしまった。株の投機で蔣介石、戴季陶らはついに負債を抱え、破産を宣告されることとなった。こうして負債から逃れるために逃げ出さざるをえなかった。ではどこへ逃げたか。蔣介石は『革命』に投機しようと考えた。これが彼の出口であった。」⁽³⁴⁾かなりいい加減な記述である。

日本で出版された蔣介石伝記では、石丸藤太『蔣介石』や楊逸舟『蔣介石評伝』⁽³⁵⁾などが、上海交易所時代の蔣介石を紹介している。

3. 回想及び1920年代の記述

この上海交易所時代の蔣介石の記録については、資料が少ないのが特徴である。従来論証で、依拠している資料は、そのほとんどが回想である。その中心となっているのは、魏伯楨「上海証券物品交易所与蔣介石」、陸丹林「蔣介石、張静江等做交易所經紀的物証」⁽³⁶⁾という回想である。魏は上海交易所の理事の1人であったから、当事者

証言として有力な証拠であることは当然である。また蔣介石と青幫の関係については、程錫文「我当黄金荣管家的見聞」⁽³⁷⁾が貴重であるとされている。

魏伯楨によれば、上海で放浪していた蔣介石がたまたま紹介されて証券取引の世界に手を染めたわけではない。むしろ上海交易所設立に積極的に携わっていたとみなす。

「1916年ごろ、孫中山先生は革命資金を準備するため、日本の某政党の建議を入れて、北京農商部に対し上海地区に上海証券物品交易所を設立するよう申請した（この文章は朱執信が書いた）。……1年後、戴季陶、張静江、蔣介石らは経済的に逼迫し、ともに金儲けの道を謀り、前案を利用することにした。また日本の某政党が紹介した某企業代表と交易所を開催する具体的な方法を協議した後、実行に着手した。まず、上海で『協進社』と呼ばれる秘密社団を組織して、その事業を計画推進した。その次は虞洽卿、趙家芸、盛丕華、洪承祁などにとりいって社員とし、勢力を拡大することであった。最後は虞洽卿が当時の上海工商界の著名人である温宗堯、聞蘭亭、李雲書、張澹如、沈潤挹、吳耀庭、顧文耀などにとりいって発起人とし、農商部に『上海証券物品交易所』の創設を申請した。」⁽³⁸⁾これによれば、蔣介石らが発案し、浙江財団の虞洽卿を利用して創設したことになる。まさに主役の1人という重要な役割を演じたことになっている。ただ、蔣介石が積極的に上海交易所の創設にたずさわったという指摘については、十分な資料的裏付けは困難なようである。同交易所に関する資料には、蔣介石が設立に関与したという痕跡は見られない⁽³⁹⁾。最初につくられた「上海証券物品交易所股份有限公司章程」の第43条に発起人の氏名が記されているものの、蔣介石らの名前は見当たらない⁽⁴⁰⁾。本当に創設に関与したとしたら、発起人は経済人に任せて蔣介石らは舞台裏に徹したのであろう。しかし総合的

に考察すれば、蔣介石が創設に直接関係したのは仲買人の会社である「恒泰号」であって、上海交易所そのものの創設には関与しておらず、後から職員として参加したと考えられる。

次に大切な指摘は、ここで蔣介石らが大幅に儲けた事実が詳細に紹介されていることである。

「開始したときの株価は30元前後であった。1920年の春に入ると株価は50数元にも高騰した。また物品交易所条例を公布すると、80元にまで達し、その年末には120元まで高騰した。」⁽⁴¹⁾ こうして1万5千株が市場で売買され、戴季陶、張静江、蔣介石らは32万5千元が手元に純益として残った。さらに手元の株券の値は480万元にものぼっていた。ところが不況に見舞われ、「1922年2月、『死刑』宣告を受け、大量の株券は紙屑に変わり、大富豪は貧しい乞食に変わった。」⁽⁴²⁾

ここでは蔣介石がいかなる額の損益を出したかは明記されていない。借金を背負ったことなども語られていない。ただ日本から100万元の援助があり、その配分で蔣介石が暗躍し、結果として「4万元のお金が蔣介石の手に入った」⁽⁴³⁾ と言いい、そのお金を持って広東に向かったのである。この回想では、当初蔣介石は魏伯楨に対し、20万元を要求したが断られたとある。そこで他人を通して脅した。「瑞元（蔣介石）は黄金榮と交遊が深く、もし蔣介石と手を打たなければ、恐らく仕事は順調に運ばなくなるだろう」⁽⁴⁴⁾ と脅迫した。こうして虞洽卿が最終的に交易所から6万元を供出して解決したとある⁽⁴⁵⁾。

この魏伯楨の回想は、細かい金額は別として、当事者の回想であるだけに、かなり信憑性が高いといわざるをえない。

陸丹林は1つの資料を提供している。「1952年春のある日、前の上海証券物品交易所仲買人『恒泰号』経理であった張秉三宅を訪れて話し合い、蔣介石が当時交易所で仲買人をしていた事に話が

及んだ。張は書箱から、当時の仲間で組織した恒泰号の合同調印書を取り出し、見せてくれた。私は、この文件は蔣介石が交易所で投機に走っていた物証であると思い、張の同意を得て借りだし、写真に撮り、保存していた。」⁽⁴⁶⁾ その写真資料を掲載しているのである。この資料によれば、蔣介石は蔣偉の名前で4株所有していることになっている。

実は、この資料はすでに唐人が『金陵春夢』で全文を紹介している資料である。このことから見て、1920年12月の段階で、蔣介石が上海で仲買人会社の恒泰号設立に関わっていた事は間違いない事実であろう。そうすると、先に見た楊樹標の記述は事実に符合しないことになる。即ち、「蔣介石が孫中山のもとに走ったのは上海交易所が倒産する以前であり、1918年春には広州へ南下した」という記述は、大きな間違いである。もし1918年春に広州へ南下していたのであれば、上海交易所開設以前であるから、仲買人をしていたこと自体が否定されることになる。

程錫文の回想は、次のように蔣介石と黄金榮の関係を述べている。

「蔣介石は当初、上海物品交易所で株価のグラフを書く小職員にしか過ぎなく、収入も少なく、とても不満であった。黄金榮の勢力を聞き、虞洽卿の紹介で黄金榮に拝顔し、先生とすることとした。黄金榮の同意によって、徐福生を伝道師とし、正式に拝師儀式を挙行し、弟子として服従することとなった。1921年、上海交易所に不景気の嵐が吹き、蔣介石と陳果夫らが経営する恒泰号仲買業は大欠損を出した。蔣介石本人も数千円の負債を負った。黄金榮、虞洽卿の名義で解決した。当時蔣は広州に赴き孫中山のもとに参加したいと考えており、黄金榮は自分が孫先生に代わって協力すべきと考え、虞洽卿と一緒に旅費を援助し、蔣を『国民革命』の道へ送り出した。」⁽⁴⁷⁾

王俯民、楊樹標、榮孟源や『権与銭』などが利

用している資料のほとんどは、これらの回想である。ただ回想だけに、若干の食い違いもあり、その結果、論述に違いが生まれているのである。同じ回想でも、同郷の楊志春は、上海交易所の活動は短期間であったと述べている。「蔣介石は1915年から1920年の間、上海で蟄居していたが、生活は零落していた。1度だけ上海交易所で仕事をしたが、短期間であった。僅かな間は豊かになったが、またたく間に交易所が倒産し、生計は困難になった。」⁽⁴⁸⁾

回想に問題があるとすれば、蔣介石が上海で活動していた1910、20年代の資料があれば、最も好都合である。ところが、今のところなかなか見つからない。手元の資料では古いところでも、1927年どまりである。

そこで1927年の段階で明らかにされている上海交易所における蔣介石の活動記述を紹介してみたい。

最も有名で、多くの伝記にも引用されているのが、秦瘦鷗編輯『蔣介石全集』に記載されている「蔣介石先生伝」である。北伐の勝利で蔣介石が新しい権力者として全国的に注目が集められた1927年5月に出版されている。基本的資料なので、その部分を訳出しておく。袁世凱に敗北した2次革命から陳炯明の叛乱までの期間の蔣介石の活動である。

「先生の性格は頑固で気が短く、怒りやすい。時に気にいらないと雷のように強暴になる。仕事は往々にして執拗であり、他人の意見を聞き入れようとはしなかった。故に同僚は彼に対して悪い感情を抱くようになった。ある日、先生は1人の同僚と対立したため、遂にみんなは耐えられなくなり、孫先生に向かって苦情を申し立てた。先生は出ていく以外に方法はなく、悄然としてそこを去った。

先生は党部を離れ、1人上海に滞在した。まったく頼りとする人もなく、時々同郷の周佩箴（現

在は広東土地庁庁長）に会うだけであった。彼は商いを習うように勧めた。先生は身を持て余していたので、なんらの問題もなかった。時はまさに上海交易所が全盛の時代であった。先生は周に従って、その方法を学んだ。即ち証券物品交易所で仲買人となったのである。その優れた才能を発揮し、仕事を手玉にとり、いつも値動きを見極め、百発百中であった。仕事には果敢に挑戦し、他人の及ぶところではなかった。半年もしないうちに巨利を得た。元金と利子を合わせて10数万元にものぼった。富豪商人となったのである。

しかし、先生にとって商売はその志すところとは大きな違いがあり、一時的なことにすぎなかった。途轍もなく成功したものの、党に戻りたいという気持ちは強く、孫中山先生が広州に戻ったというニュースを聞いて、そこに向かうことを決意した。同僚の趙士林（既に故人）らは必死で止めたが、先生はついに民国6年（1917年）12月、広州に赴いた。孫中山先生は大喜びし、直ぐに要職で迎えた。」⁽⁴⁹⁾

この文章の特徴は、幾つかある。第1点は、この上海時期に青幫の連中と交際を深めた事実が全く描かれていないことである。第2点は、他人の紹介で株の仲買人になったという事実だけで、張静江らと仲買人の会社を設立したなどの主体的活動にはふれられていないことである。第3点は、株で儲けた事実は指摘されているが、大損した事実は指摘されていないこと。第4点は、上海を離れたのが1917年という早い時期を明記していることである。この時点で上海を離れたのであれば、上海証券交易所はまだ設立されていないので、そこでの活動はなかったことになる。

更に同じ時期に出版された呉江・陶鳳子編輯『蔣介石演義』は、読物風の出版物であるが、なかなか詳しく描かれている。

「（2次革命の失敗後）数年間も江湖（ヤクザ世界）をさ迷った。やることもなくブラブラし、

生活はとても窮迫した。丁度その時、上海交易所がとても評判になって沢山の人が集まっていた。蒋介石は友人の紹介で、物品交易所に入り、拍板（呼び声をあげる人）の職に就いた。蒋介石は市場に身を寄せて、その仲買人というつまらない仕事に従事していた。まさに英雄の末路のようであった。……同郷の男女はとても興味を抱き、老人や子供まで連れて、交易所にその姿を見に行った。すると蒋介石は高い台の上にあがって、大声を張り上げていた。『3両！ 4銭！』。⁶⁰⁾

「これは拍板時代の蒋介石のことであり、あまり知られてはいない。聞くところでは、蒋介石は間もなく交易所の職務を辞した。自分で資本を手に入れ、その交易所で投機事業に精を出した。彼が投機に手を出した目的は、一般の人々のように金儲けのためではなく、巨額の金を稼いで日本に渡り、孫中山と一緒に国事へ奔走する腹づもりであった。ところが図らずも失敗してしまった。元金を失うだけでなく、負債まで負ってしまった。借金の返済に追われて、にっちもさっちもいなくなった。そこで交易所の董事（役員）を訪れて、2千元を借り、負債を精算しようとした。……その董事は太っ腹なところがあり、彼の手紙を受け取ると、直ぐに手筈を整えて2千元を工面した。蒋介石を呼んで……2千元を貸し与えた。そして立派な仕事をするように懇ろに諭した。蒋介石は感激して涙を流し、拝受した。これで債務を精算し、余ったお金を携えて、蚊と龍が水を得て古巣へ戻る（英雄の志がかなう）ように日本へ渡り、孫中山のもとへ戻った。」⁶¹⁾

この記述は、たとえ通俗読物であるとしても、当事者の回想として後に発表された魏伯楨の回想に近い内容となっている。ここでは上海交易所での蒋介石の仕事を2つに分け、単純なる事務員（拍板）と、投機に精を出す仲買人とに区別している。これも後半に仲買人会社である恒泰号を設立して投機に走った事実と符合する。ただここで

は巨利を得た事実が描かれていない。損失した事実だけである。ここで言う太っ腹な董事とは虞洽卿のことか。

上記2冊が出された翌年、即ち共産党の弾圧を開始し、全国を再統一する直前に書かれた沈石麟『蒋介石先生小史』は蒋介石礼讃の顕彰伝記であるが、ここではまだ上海交易所の活動が軍事資金調達のための輝かしい業績として描かれている。

「先生（蒋介石）と同郷の周郷佩らが資金を集めて証券物品交易所を創設した。先生も株式に加入し、そこの第52号仲買人を兼任した。……先生は冒険心に富み、天性の優秀な資質をもった人であるから、投機事業においても読みが的中して、巨利を得ることとなった。しかし先生が交易所で仕事をした期間はわずか7か月で、得た利益は16万元を越えた。後に幾つかの交易所が営業不振で失敗した。この時、先生たちが組織した交易所もその轍を踏むのを恐れて自動的に営業を停止した。これが軍事資金のために商業経営した出来事である。」⁶²⁾そして蒋介石は孫中山に合流し、この上海交易所で得た「10数万元を北伐に投じた」⁶³⁾とある。

ここでは『蒋介石演義』と逆で、巨額の利益を得た事が描かれ、損失は未然に防いだことになっている。ただ興味ある指摘は、第52号仲買人となったと具体的な数字を明記していることである。魏伯楨は次のように指摘している。「陳果夫は当時第54号仲買人であった。彼の主人は蒋介石である。仲買人は頭に白い布の帽子をかぶり、帽子には番号が書かれて識別した。」⁶⁴⁾唐人はすでに述べた如く第32号仲買人であった、と指摘している。1922年1月1日の『申報』に、上海証券物品交易所が一面慶賀広告を出している。そこに仲買人の全員の氏名が掲載されているが、それによると第54号が陳果夫であり⁶⁵⁾、魏伯楨の回想が正しい。第52号は蒋介石とは異なる人物であり、沈石麟の記述に若干の疑義を感じる。

概ね蔣介石が負債を精算して上海をはなれたことが述べられているが、この点について諸説が存在する。『蔣介石演義』では2千元を借りて負債を精算し、余った金が幾らか明示していない。王俯民は4万元を、『権与銭』は20万元を携えて広東に向かったとあるが、これは少々問題がある。王俯民の説は出所が明らかにされず、『権与銭』は出所となっている魏伯楨の回想を歪曲して利用したにすぎない。魏伯楨によれば、蔣介石は20万元を要求したが、結局のところ虞洽卿が6万元しか工面できなかった。精算して残ったのが4万元である。王俯民はこの説に依拠しているのであろう。Hauserは3万ドルの負債を負い、唐人と鍾器聲は3千元の負債だったという。唐人によれば張静江が3千元を工面し、借金を精算したことになる。『蔣介石演義』では虞洽卿らしき人物が2千元を工面したことになる。諸説紛々で金額は一定しないが、こうした記述を総合すれば、蔣介石が株投機に失敗して負債を負い、それを誰かの援助で精算して、少しの資金を携えて広東に向かった、ということは事実として承認できそうである。ただ、この『蔣介石演義』では日本に向かい、そこで孫中山と合流したとある。2次革命後に日本へ亡命していた孫中山は1916年4月に上海へ戻っているから、日本へ渡ったという記述は明らかに誤りである。

では、秦瘦鷗『蔣介石全集』、呉江・陶鳳子『蔣介石演義』、沈石麟『蔣介石先生小史』以外に、上海交易所における蔣介石の活動を記述した資料はないか。特に活動していた1910年代末の資料が欲しいところである。今のところ、それは確認できていない。新聞を調べたところ、僅か1つの文章を見出すことができた。それも1927年1月の段階である。当時は北伐軍が武漢を解放し、いずれ上海に向かうことが明らかとされている時期である。上海を支配する軍閥軍は蔣介石を激しく非難していた。その軍閥系の新聞として上海で発

行されていた『新申報』に、蔣介石を非難中傷する記事として、次の文章を見出すことができる。

「わが親愛なる浙江の皆様方よ。我等の中華民國が赤逆・蔣介石の掌中に落ちようとしていることを知らなければならない。聞くところでは、蔣介石はもともと浙江の小流民であった。4,5年前、上海交易所において店員として働いていた。株主の銭を騙したために、交易所の支配人から追い出された。彼は行くところがないので、共産主義のロシア人のもとに身を投じたのである。……浙江反赤同志会」⁶⁶⁾

これはかなり中傷目的に書かれたアピールであるが、少なくとも蔣介石が上海交易所で働いていたという事実が、この北伐時期には一般的にも知れわたっていたことを示すものであろう。

おわりに

孫中山の死後、中国国民党の序列で言えばNo.10に入るか入らないかの蔣介石が、たちまちのうちに有力な競争相手を凌駕して、No.1へ登り詰めた。その秘訣はなにか。そこに至る間に発揮された政治手腕はいかなる権謀術数を駆使して、政敵を乗り越えたのか。その権謀術数は、いかなる中国的特徴を有しているのか。このことは政治学的分析の興味ある課題となる。

そのことを考えるにあたって、1つの興味ある期間は、2次革命に失敗したあとの上海時代である。毛思誠編『民国十五年以前之蔣介石先生』⁶⁷⁾によれば、1917年から23年までの上海時期は、「韜養時期」とされている。ここでは勿論、証券投機活動については一言も触れられていないが、まさに「韜養時期」と表現されるように、政治的、軍事的な活動としてはほとんど成果を上げていない。彼が政治・軍事に力を入れなかったからこそ、「韜養時期」と表現されたのである。

この政治的・軍事的な成果を上げなかった「韜養時期」が、なぜ興味ある期間なのか。韜とは、

兵法、権謀の意味で、つつみ隠すという意味もある。即ちこの時期は、新しい権謀術数を確立する醸成の時期であった。ここで蔣介石が身につけた政治的財産は大きいのである。この時期にこそ、後の蔣介石の成功を可能にしたルーツの一つがあると考えられるからである。

後の蔣介石の政治的台頭を考えると、人脈的には次のような多岐にわたるグループを育成することに成功したことが重要である。①黄埔軍校生を中心とした軍人集団。②浙江財団の財政的援助。③戴季陶などの政客的ブレーン。④青幫などの秘密結社の暴力集団。

このうち、校長を努めた黄埔軍校時期を除けば、その多彩な人脈づくりの発端となったのは、実は上海時期であった。しかもそれは上海交易所の活動を通して強化されたのである。ところが、その肝心な上海時期の、しかも大切な上海交易所時期の活動が、彼の長い政治生活を形作る重要な時期であるという指摘は少ない。それは、証券取引という活動の性格に由来するのではなからうか。

伝統的な士農工商的差別観から言えば、士（士大夫階級）たるべき国民党のエリートが、商業活動の、しかも古典的な商品取引としての営業活動ではなく、投機的性格が濃い証券取引に従事することは、儒教的価値観からすれば、望ましいことではない。ましてや、その活動を通して、社会的アウトローである青幫との関係を深めた事は、強調すべき事柄ではない。こうした観点から、時としてその事実すらが経歴から抹殺され、時としてそれが蔣介石の汚点として非難されるのである。

しかしそうした価値観からはなれて、政治学的に見れば、この時期こそ、蔣介石政治の内容を豊かにしていく原点であったとも言える。ところが、そうした性格を有しているが故に、残念ながら上海時期の蔣介石の分析が十分になされていない。

この小論は、その時期の蔣介石を十分に解明するものではないし、新しい事実を提供するもので

もない。多くの著書の記述がいかにバラバラであるかを明らかにし、ある部分は明らかに誤りがあったことを指摘し、錯綜する諸説を整理したものすぎない。ただ、上海交易所時代の蔣介石の活動と意義を明らかにすることで、その時期が持つ重要性を強調する一助となれば、幸いである。

〔注〕

- (1) 莫永明『陳其美伝』上海社会科学院出版社、1985年、24頁。陳敏「滬軍都督陳其美」『辛亥革命時期的歴史人物』中国青年出版社、1983年、305頁。
- (2) 秘密結社については、最近多くの資料、回想録、研究書が出始めた。この論文に関係ある書物を若干紹介しておく。研究書としては、蔡少卿『中国秘密社会』浙江人民出版社、1989年。同『中国近代会党史研究』中華書局、1987年。回想録としては、『旧上海的幫会』上海人民出版社、1986年。『幫会奇観』中国文史出版社、1989年。読物としては、王恒偉・李己平・沈志强『中国秘密社会内幕』吉林文史出版社、1989年。
- (3) 孫中山と会党との関係は、拙稿「中国の共和革命運動と秘密結社」『法学研究（明治学院大学）』第37号、1986年8月を参照。
- (4) 宋平『蔣介石生平』吉林人民出版社、1987年（香港からも、宋平『蔣介石——総司令、委員長、総裁、主席、総統』利文出版社、1988年、として出版）。楊樹標『蔣介石伝』團結出版社、1989年。王俯民『蔣介石伝』経済日報社、1989年。
- (5) 柴孟源『蔣家王朝』中国青年出版社、1980年。
- (6) 陳伯達『人民公敵蔣介石』新華書店、1949年。
- (7) 匡長福・楊震・賈濤・劉寧『権与銭——蔣宋孔陳聚財録』清華大学出版社、1989年。
- (8) 楊樹標（前掲）503～506頁。
- (9) 宋平（前掲）32頁。
- (10) 王俯民（前掲）31～32頁。
- (11) 宗志文・嚴如平・鄭則民「蔣介石」『中華民国史資料叢稿・人物伝記』第23輯、中華書局、1988年5

- 月，2頁。
- (12) 楊樹標（前掲）13頁。
- (13) 同前，14～15頁。
- (14) 同前，17頁。
- (15) 匡長福・楊震・賈濤・劉寧（前掲）14頁。
- (16) 同前，19頁。
- (17) 同前，19，20頁。
- (18) 同前，23頁。
- (19) 同前，24頁。
- (20) 李敖『蔣介石研究』3集，天元圖書，1986年，294頁。
- (21) Ernest O. Hauser, "Shanghai: City for sale", The Chinese American publishing company, 1949, pp. 170-171.
- (22) 匡長福・楊震・賈濤・劉寧（前掲）24頁。
- (23) 鍾器聲『大財閥蔣介石』自由世界出版社，1948年，5頁。
- (24) 陳伯達（前掲）5頁。
- (25) 唐人『金陵春夢（金陵春夢之一）』致誠出版社，1981年再版。
- (26) 同前，70～71頁。
- (27) 同前，84～85頁。
- (28) 同前，113頁。
- (29) 同前，116頁。
- (30) 同前，86～88頁。
- (31) 榮孟源（前掲）8頁。
- (32) 同前，8頁。
- (33) 同前，10頁。
- (34) 何干之『中国民主革命時期的資產階級』上海人民出版社，1980年，71頁。
- (35) 石丸藤太『蔣介石』春秋社，1937年。ここでは蔣介石が1919年から20年にかけて上海証券交易所で働き，100万円近い大金を儲け，孫中山に軍資金として提供したとある（77～80頁）。楊逸舟『蔣介石評伝』（上巻）共栄書房，1979年。
- (36) 魏伯楨「上海証券物品交易所与蔣介石」。陸丹林「蔣介石，張静江等做交易所經紀的物証」。ともに『文史資料選輯』第49輯（合訂本，第17冊）中国文史出版社，1986年。
- (37) 程錫文「我当黄金荣管家的見聞」『旧上海的幫会』（前掲）。
- (38) 魏伯楨（前掲）149頁。
- (39) 「上海証券物品交易所史料選輯」『档案与歷史』1988年第1期，1988年3月。許念暉「上海証券交易所概況」『文史資料選輯』（前掲）第24輯（合訂本，第7冊）。鄧華生「旧上海的証券交易所」『旧上海的金融界』（上海文史資料選輯・第60輯）上海人民出版社，1988年。
- (40) 「上海証券物品交易所股份有限公司章程（統）」『申報』1919年9月23日。
- (41) 魏伯楨（前掲）152頁。
- (42) 同前，153頁。
- (43) 同前，155頁。
- (44) 同前，154頁。
- (45) 同前，154頁。
- (46) 陸丹林（前掲）157頁。
- (47) 程錫文（前掲）157頁。
- (48) 楊志春「關於蔣介石家世及其早期政治生涯瑣紀」『江蘇文史資料選輯』第5輯，江蘇人民出版社，1980年，237頁。
- (49) 秦瘦鷗編輯『蔣介石全集』上海三民公司，1927年再版，34～35頁。
- (50) 吳江・陶鳳子編輯『蔣介石演義』広州国民書店，1927年，161～162頁。
- (51) 同前，165～166頁。
- (52) 沈石麟『蔣介石先生小史』上海大東書局，1928年再版，19～20頁。
- (53) 同前，21頁。
- (54) 魏伯楨（前掲）150頁。
- (55) 「恭賀新禧・上海証券物品交易所」『申報』1922年1月1日。
- (56) 「浙人討蔣之表示」『新申報』1927年1月5日。
- (57) 毛思誠編『民国十五年以前之蔣介石先生』1936年（ここでは1965年復刻の香港龍門書店版を利用）。